

否定文「2つの読み」に関する考察

中島 千春

(福岡女学院大学)

c_nakashima@fukujo.ac.jp

キーワード : Langacker (2008)、current discourse space、認識を表す動詞 *know*、
二人称主語、否定

1. はじめに

本稿では *you don't know* の補文構文における異なる2つの「読み」について考察する。認識を表す動詞 *know* がその主語として二人称 *you* を取る場合、命題内容が事実として提示される場合、即ち叙実性が保たれる場合と、命題内容が事実として提示されない場合、即ち叙実性が失われる場合とがあり、前者をタイプ A、後者をタイプ B と呼ぶことにする (Nakashima 2015, 中島 2015)。

まずタイプ A は、下の例 (1) のような場合で、主節 *you know* (あなたは知っている) が否定されても、補文の命題内容、つまり「高校卒業後も人生は続く」は事実として提示される。つまり叙実性が保たれている。

(1)

“... When you're in high school, well, the school, your friends – they're just your whole world.” “ And you think they are the whole world,” said Louise. “*You don't know* that there's life after high school.” (COCA)

一方タイプ B は、次の例 (2) のような場合である。同じく二人称 *you* を主語とする補文構文であるが、(1)とは異なり、命題における叙実性が認められない。

(2)

A: He's real upset. He ain't never gonna forgive me.

B: *You don't know* that he wouldn't.

A: I know.

B: You don't know until you ask him. (COCA)

(2)では、話し手 A は『彼があなたを赦さない』と決めつけることはできない』と言っている。つまり don't know の補文 he wouldn't (forgive the hearer) 「彼はあなたを赦さない」という命題は、ここでは事実として提示されない。

このように、「you don't know that+命題」という同一の形式であっても、補文の命題内容が事実として提示されるタイプ A と、補文の命題内容が事実として提示されないタイプ B とが存在する。この2つのタイプの「you don't know that+命題」の解釈の違いはどのように説明されるのか？同じ形式でありながら、主節が否定されても命題は否定されずに事実との前提であるタイプ A と、主節も命題もどちらも否定されるタイプ B とでは、話し手の認知プロセスにおいてどのような違いがあるのか。本稿では、このことについて Langacker (2008)の current discourse space の枠組みを基に考えてみたい。

まず第2節において、認識を表す動詞 know の意味構造について、Langacker (2009)の control cycle を概観し、認識を表すモデルの中でどのように表されるかを見る。次に第3節では you don't know の補文構文について、Langacker (2008)の current discourse space の概念を用いて考察を行う。

2. Control Cycle と認識を表す動詞 know の意味構造

Langacker は人間の経験を一般化して表す認知モデルを control cycle として図1のように提示する(2002, 2009)。まず基本となる静止段階 (Baseline)では、actor (動作の主体)が、自分の dominion (領域) を構成する entities をコントロールしている。次の Potential の段階では何らかの target が field (場) へと入ってきて、actor はそれに対処する必要があるため tension (緊張) が生じる。更に Action の段階では、actor が何らかの力を行使 (二重線の矢印で表される) し、自分の dominion の内側に取り込む。その結果、新たな状況での stasis (静止状態) がもたらされる。

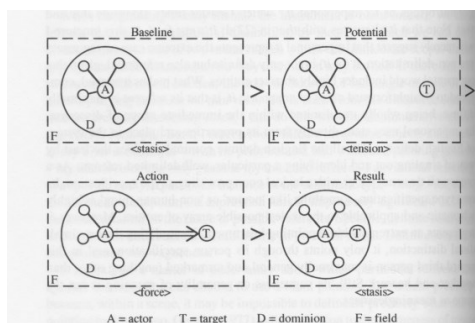


図1

(Langcker 2009: p130)

この control cycle は、例えば猫がネズミと遭遇し、自分の支配下に置くといった物理的な出来事を表すこともできるし、知覚や心的状態、或は社会的なレベルについても表すことができると考えられる。認識レベルでの control cycle の場合には、命題知識の取得に関わる認知モデルとして図2のように表される。この場合、actor は conceptualizer (認知主体) であり、target は proposition (命題)、dominion は認知主体の view of reality (または epistemic dominion)、つまり認知主体が目下有効と考えている命題ということになる。

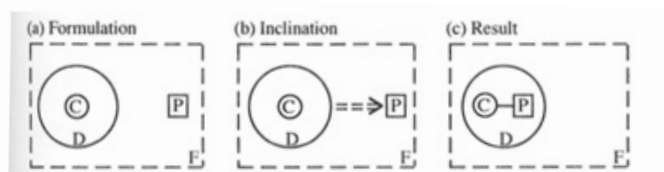


図2 (Langacker 2009: p131)

更に、言語表現はその意味内容によって、control cycle のどの段階を表すかが異なり、認識を表す動詞のタイプごとのマッピングを、Langacker は図3のように表す(2009: p131-132)。本稿で扱う認識の動詞 know については、「認知主体(actor)が命題(target)を形成、評価し、それらを受け入れることで自らの view of reality(domain)を構築している」という状態がその意味内容であり、従って(3a)のように Result の段階を表すということになる。

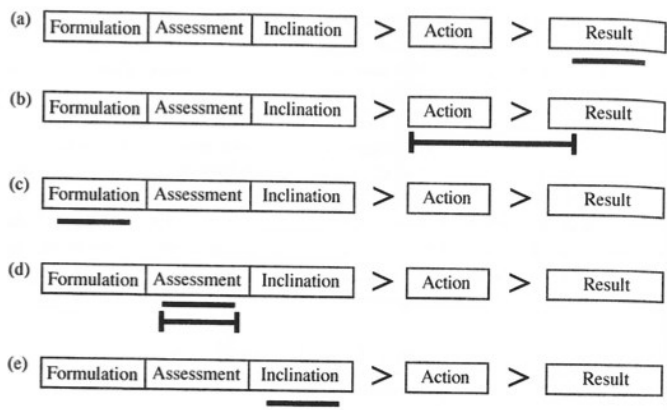


図3 (Langacker 2009: p132)

(3)

- a. Result: He {knows / believes / thinks / realizes / accepts / is sure / is certain / is convinced} that Bush is a pacifist.
- b. Action: She {learned / discovered / decided / concluded / realized / determined / found out / figured out} that his whole story was a pack of lies.
- c. Formulation: It is {possible / conceivable / plausible / feasible / imaginable} that they could be of some use to us.
- d. Assessment: He {wondered / considered / asked / was unsure / was undecided / was unclear} whether the effort was worth the bother.
- e. Inclination: I {suspect / believe / suppose / think / figure / reckon} they will never agree to my offer. (Langacker 2009: p132)

第2節では、認識を表す動詞 know の意味内容が Langacker (2009) の control cycle の中でどのように表されるかをみた。次の第3節では、Langacker (2008) の current discourse space の枠組みに基づき、本稿で取り扱う2つのタイプの you don't know の補文構文について考察をおこなう。

3. you don't know 補文構文と2つのタイプ

3.1 Current Discourse Space と否定

Langacker は「否定によって、否定された内容に対する肯定の概念が喚起される (2008: p. 59)」と論じ、例を用いて次のように説明する。

(4)

A: Will Victoria agree to be a candidate?

B: She may not.

C: But Stephanie will. (Langacker 2008: p59)

話者Bの not の使用はBの発話以前に導入された「候補者になることに Victoria が同意する」という概念に対応していると解釈される。つまり、話者Aが Victoria が同意することの可能性について言及しなければ、B が not を用いて否定を行う根拠は何処にもないという訳である。¹

¹ 母親：そんなに暑くないね。

息子：俺、暑いとか一言も言ってないし。

母親が「暑くない」と否定の発話をするからには、その前に「暑い」という発

このように、談話における表現は、その背景となる先行談話に基づいて構築され、解釈される。表現の意味において最も重要なのは、話し手と聞き手が互いに「何を知っているか」や「何を意図しているか」について読みを行うこと (interaction) であり、話し手と聞き手が表現の解釈のために構築する共通の基盤を、Langacker は *current discourse space* (以下 CDS) と呼び、図 4 のように表す (2008: p59, p281, p466)。

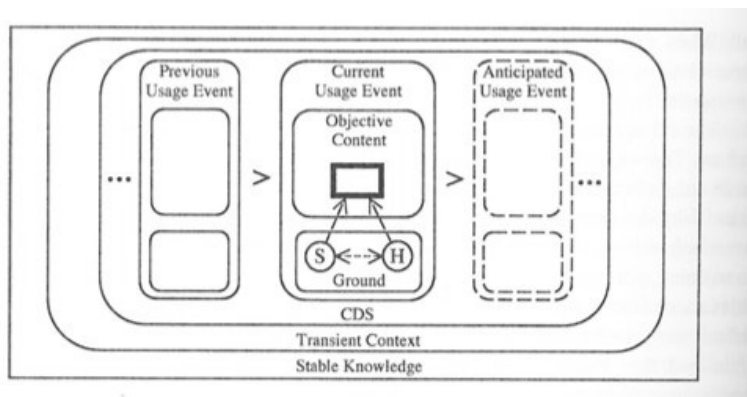


図 4

(Langacker 2008: p466)

CDS において、まず *previous usage event* での情報に基づき、*ground* の話し手 (H) と聞き手 (S) は互いの知識を読み合い、それに基づき *current usage event* での発話を行う。更に発話の結果として期待される内容が *anticipated usage event* として表される。

この Langacker の CDS の概念に基づき、本稿における 2 つの否定のタイプの意味構造の違いについて説明を試みる。

3.2 タイプ A における否定

話がなされているのが自然なコミュニケーションの流れであって、それを守らない母親の発話「暑くないね」はこの場面で唐突に響くというのが、ここでの息子の主張となっている。

まずタイプ A の否定文について、CDS の概念に基づき考察を試みる。先に見たように、談話の解釈は話し手と聞き手が互いの知識を読み合った上で構築する共通の基盤に基づいている。

- (5) “... When you’re in high school, well, the school, your friends – they’re just your whole world.” “ And you think they are the whole world,” said Louise. “*You don’t know that there’s life after high school.*” (= (1))

まず previous usage event において話し手²は、聞き手が「高校卒業の後にも人生は続く」という命題を情報として持っていないという読みを行っている。その読みに基づき、current usage event において話し手は“you don’t know that there’s life after high school”という発話を行うわけだが、ここでは、聞き手が「高校卒業後も人生が続く」という事実に気づいていないことをあくまでも客観的な事実としての描写する訳である。この発話によって期待される結果は、聞き手もまた「高校卒業後も人生がある」という命題を情報として持つことである。本稿では、Langacker の CDS のモデルを基に、タイプ A を図 5 のように表すことを提案する。

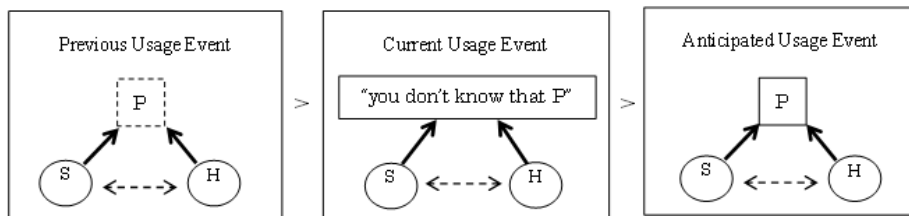


図 5

図 5 で示すように、current discourse space の中に以下のような 3 つの側面があると考えられる。まず、previous usage event において、話し手 (S) は聞き手 (H) が命題 (P) を自らの領域(D)に受け入れていない、即ち知識として持っていないという読みを行う。(P (命題) が実線でなく点線で囲まれていることで示される。) 話し手はその読みに基づき、current usage event において“you don’t know that P”という発話を行い、聞き手 (H) に共同注視を促す。この発話によって期待される結果は、聞き手 (H) が命題 (P) を話し手と共有することであり、これ

² この場合の you は一般的な人を指す generic の you と解釈することも可能であろう。

が anticipated usage event において図示される。(P (命題) が実線で囲まれることで示される。)

更に例 (6) を見てみよう。

(6) That's the great genius of Washington the architect. *You don't know that those are the slave quarters.* There are no doors, there are very small windows. He made it invisible. (COCA)

まず previous usage event においては「建物が奴隷用の住居である」という命題を聞き手は情報として持っていない。その読みを行った上で話し手は current usage event において “you don't know that those are the slave quarters” という発話を行う。期待される結果は、聞き手もまた「建物が奴隷用の住居である」という命題を有することである。

先に見たように Langacker は例文(4)に関して、「否定によって、否定された内容に対する肯定の概念が喚起される」と論じる。しかしながら、例(5)(6)で見たように、タイプ A の you don't know that 構文は否定文ではあるが、これによって you know (聞き手が命題を知っている) という肯定の概念が喚起されるとは言えないだろう。むしろ聞き手が命題を「知らない」(you don't know) という読みに基づき、「聞き手がその命題について無知(ignorant)である」という情報を伝えた上で、命題内容そのものについても聞き手に伝えるのが、タイプ A の発話の意図だと考えられる。

3.3 タイプ B における否定

次にタイプ B について、CDS の観点から説明を試みる。

(7)

A: He's real upset. He ain't never gonna forgive me.

B: *You don't know that he wouldn't.*

A: I know.

B: You don't know until you ask him. (= (2))

まず previous usage event において、A (聞き手) は “he ain't gonna forgive me” と言っている。そのため話し手は、聞き手が「彼は私を許さない」という命題を持っているという読みを行っている。そこで current usage event において、“you

don't know that he wouldn't"という発話を行う。期待される結果は、「彼は私を許さない」という命題を聞き手が捨て去ることである。ただし(7)において A (聞き手) は、最初 I know (いいえ、私にはわかる) と答え、依然「彼は私を許さない」という命題を捨てないでいる。そこで話し手(B)は再び you don't know until you ask him という発話を行って、聞き手(B)に「彼は私を許さない」という命題を捨てさせようとするのである。本稿ではタイプ B を Langacker の CDS のモデルに基づき、次のような図で表示することを提案する。

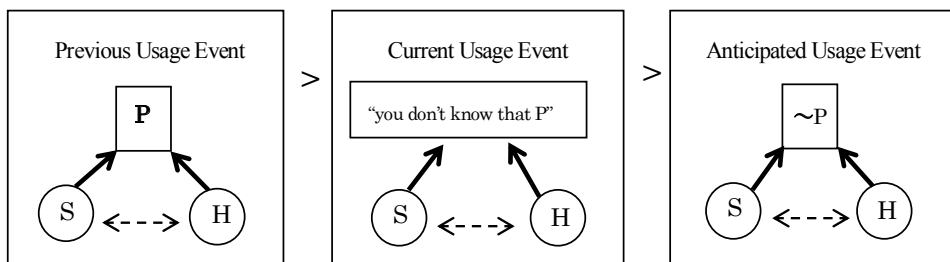


図 6

図 6 では、話し手 (S) はまず previous usage event において、聞き手 (H) が命題 (P) を自らの領域 (view of reality) の中に持っているという読みを行う。そこで current usage event において発話 “you don't know that P” (あなたには命題の真偽はわからない) を行う。期待される結果として、聞き手は真実と信じていた命題 「P」 を捨て、逆の命題「~P」をリアリティーとして受け入れるようになる。更に例 (8) を見てみよう。

(8) Besides, *you don't know that* he'll spend the money on alcohol. Maybe he's hungry.
 Maybe he wants a nice steak. (COCA)

まず話し手は previous usage event において、聞き手が「彼がそのお金を使って酒を買うだろう」との憶測をしているとの読みを行う。しかし、話し手自身はそういった憶測は誤りとの思いがあり、current usage event において “you don't know that he'll spend the money on alcohol” との発話を行う。更にその根拠として、彼がお酒ではなく食べ物を買うのかもしれないという可能性を示唆する。期待される結果は、聞き手もまた、「彼がそのお金で酒を使う」という命題を捨て去る状態となることである。

タイプ A とは異なり、タイプ B の場合には Langacker の指摘するように「(current usage event の)否定によって、否定された内容に対する肯定の概念が喚起される」ということが言えよう。即ち、タイプ B の場合には、否定の発話“you don't know”によって、肯定の概念“you know”が喚起される。つまり「聞き手 you が命題内容を真として受け入れている」ことが current usage event の前提となっている訳である。

4. まとめ

本稿では、認識を表す動詞 know に関して、聞き手の知識を否定する「you don't know + P (命題)」という同一の形式において異なる 2 つの読みが可能であることを指摘し、それぞれの読みにおける認知モデルを、Langacker(2008)の current discourse space の枠組みに基づき、次のように提案した。即ち、タイプ A の場合には、まず previous usage event において話し手は、「聞き手が命題について何も知らない」という読みを行い、それに基づき current usage event において、「聞き手が命題について無知 (ignorant) である」という情報の提示を、発話“you don't know that P (話し手が有する命題)”によって行う。発話の結果、anticipated usage event として、聞き手が話し手と命題内容を共有することが期待される。一方、タイプ B の場合には、previous usage event において話し手は、「聞き手の信じる命題が自分とは異なる」という読みを行い、current usage event において、“you don't know that P (聞き手の有する命題)”という発話を行う。話し手がこの発話で期待するのは聞き手に命題内容を捨て去ってもらうことであり、このことが anticipated usage event において表されるのである。

参考文献

- Kiparsky, Paul, and Kiparsky, Carol (1970) Fact. In Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph (eds.), *Progress in Linguistics*: 143-173. The Hague: Mouton.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundation of Cognitive Grammar*. Vol. 1, Theoretical Prerequisites. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Nakashima, Chiharu. (2015) Complement Clause with the Verb *Know*: *You* as “Object of Conceptualization” or “Subject of Conceptualization”? *Fukuoka Jo Gakuin*

- University Bulletin, Faculty of International Career Development*, Vol.1: 1-16.
- Verhagen, Arie. (2005) *Constructions of Intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*. Oxford: Oxford University Press.
- Verhagen, Arie. (2007) Construal and Perspectivization. In Dirk Geeraerts and Hubert Cuychens ed. *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- 中島千春 (2015) 「認識を表す動詞 know の補文構文と二人称主語に関する考察」.
『九州大学言語学論集』第35号
- 中村芳久 (2010) 「否定と(間)主観性: 認知文法における否定」. 加藤泰彦、
吉村あき子、今仁生美 (編) 『否定と言語理論』東京: 開拓社.

コーパス

The Corpus of Contemporary American English (<http://corpus.byu.edu/coca/>)[COCA]

Current Discourse Space and the Two Interpretations of Negatives

Chiharu Nakashima
(Fukuoka Jo Gakuin University)

In discourse, the speaker and hearer engage in assessing each other's knowledge and intentions, which is the key factor of the linguistic meaning of an expression. In other words, interpretation of an expression is impossible without the common ground provided by the overall context, which is shared by the interlocutors (Langacker 2008, p465). Langacker calls this common basis for interpretation the current discourse space (CDS). Based on this concept of CDS, this paper examines the two different readings of the complement clauses *you don't know* + P.

With the verb *know*, which is one of the factive predicates, truth of complements is generally presupposed, and even when the main clauses are negated the complements are not (Kiparsky and Kiparsky 1970). When the sentence subject is *you*, however, there are cases where the propositions do not stay as valid if the main clauses are negated. Thus, we propose two types of *you don't know* + P: type A, in which the factivity is kept intact even when the main clause is negated; type B, in which the feature of factivity is lost when the main clause is negated (Nakashima 2015). Type A is exemplified in (1); type B in (2) as below.

- (1) "... When you're in high school, well, the school, your friends – they're just your whole world." "And you think they are the whole world," said Louise. "*You don't know that* there's life after high school." (COCA)
- (2) A: He's real upset. He ain't never gonna forgive me.
B: *You don't know that* he wouldn't.
A: I know.
B: You don't know until you ask him. (COCA)

The objective of this paper is to elucidate how such a difference in factivity, or, more precisely, the two different readings of *you don't know* + P, are brought about, based on Langacker's model of CDS.